

先日、大阪駅で「転落事故防止のためにホーム側に向けたベンチを、横向きに変えました」との張り紙を見つけました。きっと、この対策法に至るまでには「酔っぱらった人はこの椅子に座るのを禁止！」などの案が出たかもしれません。しかし、実際は、椅子の向きを横向きに変えただけでした。この方法により、大幅に事故件数が軽減したそうです。相手に変化を求めるのではなく、環境を工夫して改善する良い方法だと感じました。

この発想は、福祉用具専門相談員が行う環境づくりとよく似ています。例えば、ある人が食事中に咽せ込んでしまったのは、観ていたテレビの位置が高かったため、顎が上を向く姿勢となってしまったことが原因とわかり、テレビの位置を低い位置に変更したことで、劇的に咽せ込みがおさまったというようにです。食べられない人を見たとき、その方を変えようとするのではなく、環境を工夫すれば改善できる、という見方をすることによって改善方法が見つかります。

今年の8月よりスタートしたワーキンググループ「100均介護」は、まさに、環境の工夫をテーマにしています。食品のパッケージの形状や、食事や口腔ケアでの不便なことを、100均ショップに売っている商品や、身近にある物を工夫して使うことで解決していこうと、皆で知恵を絞っているのです。

(福祉用具専門相談員 山上 智史)

URUZO!メンバーが贈る介護食品

⑤ 株式会社ヤヨイサフーズ

私は甘いものが大好きなのですが、中でも、和の気分ときは、なんとなく和菓子が食べたくありません。そこで、今回は、弊社やわ



らか食ブランド「ソフリ」の中から、和菓子風の商品をご紹介します。

商品化のきっかけは、介護施設の栄養士の方から「高齢者にお団子を食べさせてあげたいが、粘りがあるため提供することが難しい」というお話を伺ったことでした。その後も「和菓子を食べてほしいという要望が多い」とのご意見を頂いたことが、「和風デザート」シリーズにつながりました。

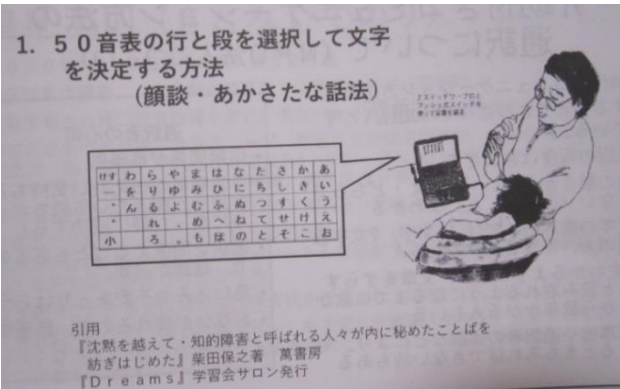
「舌でつぶせる“やわらかさ”と「和菓子の味わい」を再現したこのシリーズは、お餅・お団子風のゼリーにとろりとしたソースをあわせた2層仕立てになっており、定番の「みたらし団子風デザート」「あんころ餅風デザート」や、季節感のある「さくら餅風デザート」などのラインナップがあります。いずれもご好評を頂いております。

やわらか食「ソフリ」は、これからも皆様の「食べたい」想いに少しでも寄り添えるような商品をご提供して参ります。

(介護食品メーカー 鈴木 智子)

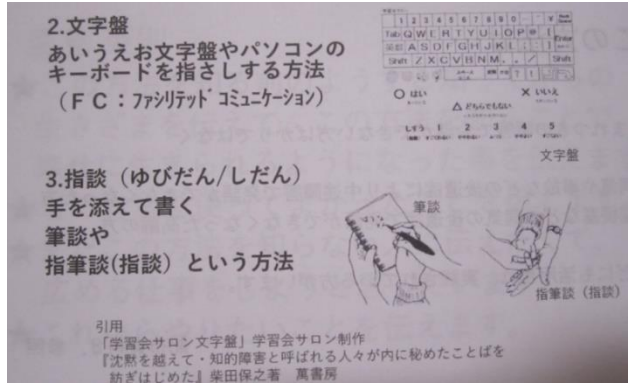
障がい者とのコミュニケーション 新宿食支援研究会 WG SKTS 堀尾隆

以前より文字盤や指談(しだん)といった方法で、脳性麻痺などの障がいを持った方とのコミュニケーションが研究されてきていました。時には機械操作でコミュニケーションツールも研究されてきていたようですが、実用化につながるものはなく、結果的に、アナログ的な文字盤や指談がコミュニケーションをとる最も早い方法であることがわかってきました。そう教えてくださったのは、NPO 法人こつこつの方々です。



NPO 法人こつこつは、脳性麻痺などの障がい者の当事者やその家族、そして、その賛同者で構成されている団体で、障がいの方は、普通に物事の理解をし、十分に自分の思いや考えを、何らかのコミュニケーションツールでつながることができるということを、世の中に広めていく活動をしています。

この法人が発足するのに至った、事のはじまりは、国学院大学教授の柴田保之教授との出会いでした。柴田教授は、元々、障がい者教育の研究者として、長年、障がい者の方のコミュニケーションについて研究してきた方です。その障がい者の方にあったコミュニケーションツールを製作することにも真剣に取り組んできました。しかし、柴田教授が行き着いた方法が、文字盤や指談といった方法で、こつこつのメンバーの当事者の思いを指談を通じて解釈できたことで、



当事者や家族が衝撃を受けたのでした。指談は、当事者の指を使って仲介者の手に文字を書き、その内容を仲介者が話すと聞いた方法で、間接的に見ている人からは、仲介している人の思いで勝手に言葉を繋げて話しているように見えてしまいますが、実際には、当事者が伝えたい言葉を指談で伝えています。

NPO こつこつのメンバーとの交流は、新宿食支援研究会の「ワーキンググループ SKTS (最期まで口から食べるを支える会)」(以下「SKTS」)にて、初めてお招きしたことがきっかけですが、元々、SKTS で、「障がい者の食べることにに関する現状を知ろう」ということで、食べることを中心に話を聞かせてもらうつもりでしたが、当時、参加した SKTS メンバーは予期せぬ状態に遭遇しました。それは、障がい者の方の意思が十分に伝わるという事態でした。当事者は、十分に物事を理解し、物事を考える能力に十分に長けているということがわかりました。彼らは、ただ、コミュニケーション障がいがあるということだということが分かったのです。

これまで SKTS は、主に、高齢者の置かれている立場から「最期まで口から食べる」を考えてきましたが、NPO 法人こつこつのメンバーとの出会いを通じて、より幅広い視野を持つ必要性があると認識しました。小児のこと、難病の方、そして、現代の若者など、あらゆる方面からの「最期まで口から食べる」を考えていきたいと思えます。